

1章 総合問題1

問題

【1】

解答

- (1) A **b** B **b** C **a** D **b** (2) ① **a** ② **b** ③ **a**
(3) **b** (4) **c** (5) ① **c** ② **c** ③ **d** ④ **d** ⑤ **a**
(6) **d, f**

解説

(1)

- A translate A *into* B 「A を B に翻訳する」
B 第2段落第1文 speak across a language barrier (言葉の壁を越えて話す) に対して、within our own country や within our own families は「言葉の壁がない所」の例え。したがって、関係副詞の where が入る。our own families も「場所」としてとらえられている。
C この文では、コミュニケーション技術の進歩の「目覚ましく革命的」というプラスの要因と、コミュニケーションにおける人間的特性の理解の「かなり限られている」というマイナスの要因が対比されている。したがって、Although が入る。
D 後に続く主節の冒頭に then があることから、これと呼応して使われる If が入る。

(2)

- ① undertake ~ 「~を引き受ける」, overseas 「海外の」, assignment 「仕事」
② get ~ across 「~を伝える [理解させる]」
③ この while は「…ではあるが」の意味で、後の certainly と呼応して、certainly ~ but … (確かに~ではあるが…) と同様に、‘譲歩’の意味を表す。

(3) “Just what is it that is lost?” は “What is lost?” の強調構文で、「失われるものというのとは一体何なのか」の意味。

- a** 「客車の中というのは考え事をするのに最適の場所だ。」
真主語を後置した遊離構文。it は a railway carriage を指す。
b 「私にスキーに興味を持たせたのはトムだ。」
強調構文。
c 「ナンシーの家族と一緒に過ごせて非常に楽しかった。」
it は to 以下を受ける形式主語。
d 「目的地に着くと、雪が降っていた。」
「天候；寒暖；時間」などを表す it。

(4) 空所の前の Whether the words ~ communication function は主部の名詞節で、「我々が用いる言葉が意図した通りのコミュニケーション機能を忠実に果たすかどうかということ」の意味。これに対応する述語動詞は、3人称単数の depends である。

- (5) ① ap-pró-pri-ate [əpróupriət] 「適切な」
- a ác-cu-ra-cy [ækjərəsi] 「正確さ」
 - b déf-i-nite-ly [défənətli] 「確かに；明確に」
 - c in-tér-pret-er [intérprətər] 「通訳」
 - d rél-a-tive-ly [rélətvli] 「比較的」
- ② díf-fi-cul-ty [dífikəlti] 「難しさ」
- a anx-i-e-ty [ænzáəti] 「不安」
 - b ad-ver-tíse-ment [ædvərtáizmənt] 「広告」
 - c lít-er-ar-y [lítərəri] 「文学の」
 - d re-cíp-ro-cal [rɪsɪprəkl] 「相互の」
- ③ bár-ri-er [bærɪər] 「障壁」
- a ad-vén-ture [ədvéntʃər] 「冒険」
 - b col-lí-sion [kəlɪʒən] 「衝突」
 - c ex-tín-guish [ɪkstɪŋɡwɪʃ] 「～を消す」
 - d méch-a-nism [mékənɪzəm] 「機械装置」
- ④ ób-vi-ous [úbviəs] 「明らかな」
- a de-pár-ture [dɪpártʃər] 「出発」
 - b fa-míl-iar [fəmɪljər] 「よく知られている」
 - c pi-án-o [piænou] 「ピアノ」
 - d rés-o-lute [rézəlút] 「断固とした」
- ⑤ com-pár-a-tive-ly [kəmpérətɪvli] 「比較的」
- a in-tél-li-gent-ly [intélɪdʒəntli] 「聡明に」
 - b ín-ter-est-ing-ly [ɪntərəstɪŋli] 「興味深く」
 - c o-ver-whélm-ing-ly [ðʊvərwélmɪŋli] 「圧倒的に」
 - d spír-i-tu-al-ly [spírɪtʃuəli] 「精神的に」

(6)

- a 「人々が同一の言語を話せば、コミュニケーションの断絶に悩まされることはない。」第2段落第2文 There are breakdowns in communication within ... no language difference. に矛盾する。
- b 「話し手と聞き手の心理的意味に違いがなければ、コミュニケーションは役割を果たさないかもしれない。」第4段落第7文 The communication is often only a partial success ... respectively. に矛盾する。
- c 「外国を旅行する時のコミュニケーションの問題は、外国語を習得することで解決される。」第1段落第3文 the mistake most of us make ... the appropriate foreign language. に矛盾する。
- d 「人々がお互いにコミュニケーションを図る時、人生経験が異なると満足のいくレベルの理解に達することはできない。」第3段落第2文 communication problems arise in any situation ... not the same に一致する。

- e 「年齢や性別の違いは、コミュニケーションの問題としては重要な要因ではない。」第3段落第2～3文 communication problems arise in any situation … entirely different languages. に矛盾する。
- f 「コミュニケーションにおける完全な理解は、聞き手の主観的な反応が異なるために、ほとんど不可能である。」第4段落第6～7文 Usually it does not work out this perfectly. The communication is often only … respectively. に一致する。

全訳

私たちが外国旅行をしたり、海外での仕事を引き受けたりする際に、ある程度コミュニケーションの問題が生じることが予想される。私たちの関心は、外国語そのものとか、語学の授業とか、どの程度英語が話されるかにとらわれてしまう。しかし、私たちのほとんどが犯す間違いは、コミュニケーションの問題は言葉の違いだけから生まれるもので、その問題は、語学のコースを修了し、自分の英語の発想を的確な外国語に翻訳する方法を学べば解決できると思っ込んでいることである。

コミュニケーションを言語よりも広い意味で考える時、意味を伝えることの難しさは、言葉の壁を越えて話をしなければならぬ人々だけの問題ではないことを私たちは認識する。言語の違いなど存在しない私たち自身の国の中において、あるいは、私たち自身の家族の中においてでさえ、コミュニケーションの断絶がある。しかし、私たちは、外国語を使ったり通訳を使ったりする際に、「翻訳すると失われるものがある」とただ単純に言って、あまり深く考えずに自分たちの問題を片づけてしまう。もし私たちの関心が本当にコミュニケーションにあるのなら、明らかな問題は、「では一体失われるのは何なのか」ということなのである。

現代のコミュニケーション技術の進歩は目覚ましいものがあり、実際革命的でさえあるが、コミュニケーションにおける人間的特性への理解は、かなり限られている。コミュニケーションには、思想、概念、象徴的意味が含まれているので、コミュニケーションの問題は、伝達者同士の人生経験が同じではないどんな状況においても生じる。この違いは、年齢や性別の違いといった単純なことから、異なる文化で暮らし、まったく異なる言語を話すといったことまでさまざまに及ぶ。

したがって、私たちが訪問する国で話される現地の言葉を話したり理解したりすることは、確かに有用な技術ではあるが、言語自体や一般に受け入れられる翻訳を超えて初めて、人間のコミュニケーション過程を結局のところ決定する一連の複雑な心理的過程を自覚できるようになる。コミュニケーションの合図を送る物理的な過程は、比較的単純である。それは、送り手からの合図が、受け手に取り上げられて解読される過程である。しかしながら、このことは、人間のコミュニケーションの非常に複雑な心理的過程の最初の一步にすぎない。私たちが用いる言葉が、意図した通りのコミュニケーション機能を忠実に果たすかどうかは、その言葉が聞き手の精神的過程の中で引き出す主観的な反応に主として左右されるからである。もし、話し手が言葉を使った時に念頭に置いていたのと同じ意味を、聞き手が合図を解読する際に言葉に結び付けるとすれば、コミュニケーションは成功したことになる。通常は、コミュニケーションはこのようにうまく運ぶことはない。伝達者と受け手がそれぞれ言葉に結び付けている心理的意味の間にある程度の違いが生まれる結果、コミュニケーションが部分

的にしか成立しないことがよくある。心理的意味に影響を及ぼす要因は、多様で深遠なものであると言える。

注

- ℓ. 1 ◇ some degree of ~ 「ある程度の～」
- ℓ. 2 ◇ our attention is fixed on ~ 「我々の関心は～だけにとられる」
- ℓ. 4 ◇ assume ~ 「～と思い込む」
◇ stem from ~ 「～から起こる」
- ℓ. 7 ◇ in a sense broader than ~ 「～よりも広い意味で」
- ℓ. 8 ◇ be limited to ~ 「～に限られる」
- ℓ. 9 ◇ breakdown 「崩壊；故障」
- ℓ. 11 ◇ dismiss ~ 「～を退ける」
◇ not too thoughtfully 「あまりよく考えないで」
- ℓ. 12 ◇ “it loses something in translation” 「翻訳では失われてしまうものがある」
原語通りの意味ですべて伝わらないということ。
- ℓ. 15 ◇ human dimension 「人間的特性」
- ℓ. 17 ◇ arise 「生じる」
- ℓ. 19 ◇ entirely 「まったく」
- ℓ. 21 ◇ go beyond ~ 「～の範囲を超える」
- ℓ. 22 ◇ in final analysis 「結局は」
- ℓ. 25 ◇ decode ~ 「～を解読する」
- ℓ. 26 ◇ faithfully 「忠実に；正確に」
- ℓ. 27 ◇ subjective reaction 「主観的な反応」
- ℓ. 28 ◇ elicit ~ 「～を引き出す」
◇ attach A to B 「A を B に持たせる [結び付ける]」
- ℓ. 31 ◇ partial 「部分的な」
- ℓ. 33 ◇ respectively 「それぞれ」
◇ factor 「要因」
- ℓ. 34 ◇ varied 「多様な」
◇ profound 「深遠な」

【2】

解答

- (1) 「全訳」の下線部④参照。
- (2) この12歳の少女は、英語を理解し、「残念です」の意味で I'm sorry を使っている。しかし、「sorry = ごめんなさい」と短絡的に覚えているため、自分が書いた I'm so sorry that Grandfather died. を「おじい様が亡くなってごめんなさい。」と直訳してしまっただけである。つまり、この少女は日本語力が極めて不十分なため勘違いをしているだけであり、sorry の意味の二重性とは、無関係である。
- (3) (A) **d** (B) **d** (C) **b** (D) **a** (E) **b**

解説

- (1) ○ there are many ways that women talk 「女性の話し方にはいろいろある」
この that は関係副詞。
○ make sense 「賢明である」
○ effective 「感銘を与える」
○ powerless 「弱い；頼りない」
- (2) ○ This confusion is rooted in the double meaning of the word sorry 「この混乱の原因は、sorry という語の多義性にある」
○ この段落を読めばわかるが、この段落に出てくる 12 歳の日本人の少女は、日本語が未熟で I'm sorry に対応する日本語が「どうもすみません」としか思い浮かばないだけであるので、sorry の多義性とは関係がない。筆者の、この段落の分析は、言語学的にはまったく根拠がないものであると言える。
○ be rooted in ~ 「～に根付いている」
○ the double meaning of ~ 「～の二重の意味；多義性」
- (3)
- (A) “I'm sorry” と言う時、
a 「人は自分自身を低い立場に置くということはない。」
b 「女性は自分自身を低い立場に置くのをためらう。」
c 「人は常に相手に対する共感や関心を示す。」
d 「女性は謝罪ではなく相手に対する共感や関心を意味することがよくある。」
ℓ. 5 an apparent apology may not be intended in that spirit at all 参照。具体的には ℓ. 26 Women frequently say … not apology. ということ。
- (B) 第2段落の教師は、
a 「生徒が停学処分になったことに責任があった。」
b 「校長が自分を許してくれると思っていた。」
c 「校長が自分を許してくれるべきだと感じた。」
d 「自分は生徒が停学処分になったことに責任はないと思っていた。」
ℓ. 10 it had not occurred to her that the student's suspension might be her fault 参照。
- (C) 教師が家族にその出来事を話した時、
a 「息子だけでなく、娘も彼女に賛成した。」
b 「娘は彼女に賛成したが、息子は賛成しなかった。」
c 「娘は彼女に賛成せず、息子もそうだった。」
d 「娘は彼女に賛成しなかったが、息子は賛成した。」
ℓ. 18 When this teacher told the grown daughter … as an apology. 参照。
- (D) 第5段落の日本人の少女は、言葉というものは（ ）ということに気づいた。
a 「2つ以上の意味があることもある」
b 「正確に訳すのが簡単だ」
c 「常に1つははっきりとした意味がある」

d 「どの言語でも常に対応する言葉がある」

○ equivalent 「対応する」

ℓ. 35 this girl realized that an expression … when interpreted literally. 参照。

(E) ベバリーは “I’m sorry” と言った時、

a 「謝罪のみを意味していた。」

b 「上司に対する感謝と気遣いを表しただけだった。」

c 「上司に対する謝罪と、感謝と気遣いの気持ちの両方を表していた。」

d 「上司に対して謝罪するつもりも、感謝や気遣いの気持ちを表すつもりもなかった。」

ℓ. 43 Beverly was surprised, since … and was offended when he said … 参照。

全訳

①女性の話し方には、女性同士の会話では賢明で感銘を与えるが、男性との会話では、頼りなく自らを責めているように聞こえるものがたくさんある。その1つとして、女性の多くはいつも謝っているように聞こえる。謝るといのは、自らを一段低いところに置くという行為である。このようなことは明らかなことのように思える。しかし、次の例は、一見謝罪のように聞こえるものが、その心の中ではまったくそうではないということを示している。

ある女性教師が、誰も手に負えないと言われていた生徒に手を焼いていた。ついに、彼女はその生徒を校長室へ行かせた。やがて、職員室で校長が彼女のところに来て、その生徒を停学にしたと彼女に告げた。彼女が “I’m sorry” と答えると、校長は「あなたの責任ではないよ」と慰めた。校長のこの慰め方に彼女は呆気にとられてしまった。というのは、校長がそんなことを言うまで、その生徒が停学になったのは自分に責任があるなどは夢にも思っていなかったからである。彼女にとって、“I’m sorry” は「申し訳ありません」でなく、「それを聞いて残念です」の意味であった。“I’m sorry” と言ったのは、「このことを残念に思っているらっしゃるでしょうが、私も同様です」ということを伝えることで、校長とのつながりを持つとしたのである。つまり、共感できるということで校長に近い立場に自らを置こうとしたのだ。が、校長は、彼女が共感を示すつもりで言った言葉を謝罪と解釈して、彼女に責任があるかもしれないという見解を持ち、それを許すという一段高い立場に自分を置いたのであった。

この話には続きがあり、このような見解の相違は性の違いに関係があるかもしれないということを示している。この出来事について彼女が自分の成人した娘に話すと、娘は彼女と同じく「校長先生がおかしい」と言った。しかし、息子と夫に言うと、彼らは「自分に責任がないのに謝る方が悪い」と彼女を非難した。彼らもまた “I’m sorry” を謝罪と解釈したのである。

女性が謝りすぎると見せてしまういくつかの、人間関係における力関係がある。1つには、女性がすぐに謝ることが多いのは、女性は本能的に低い立場に身を置くことを躊躇ちゅうちよしないからである。別にそうすることが好きなのではないが、頭の中でそれを自然に警戒するということが少ないのだ。しかし、もう1つの要因としては、女性は自分は謝っているつもりではないのに謝っているように聞こえるということがある。女性のよく使う “I’m sorry” は謝罪を表すのではなく、共感や関心を示すのである。

この混乱の原因は、sorry という語の多義性にある。その多義性は次の逸話によく表れて

いる。米国に住む12歳の日本人の少女が、祖父が死んだので、日本にいる彼女の祖母にお悔やみの手紙を書いた。彼女は日本語で書いたのだが、英語の方が慣れていた。“I'm so sorry that Grandfather died.”というお決まりの文で書き始めたのだが、間もなく書くのをやめて、自分が書いた文を読んでみた。「おかしいわ。私がおじい様を殺したわけではないのに。」彼女は母親に言った。慣れ親しんでいない言語で手紙を書いていたので、ほとんどの人が自然に使う表現でも、文字通り解釈すると別の意味になってしまうことがあるということに彼女は気が付いたのである。比喩的に遺憾の意を表すつもりで用いた“I'm sorry”が、文字通りには「謝罪」と解釈され得る。

言語の慣習上の用法と文字通りの用法との違いは、次の例にも表れている。ベバリーという会社員の女性が旅行から戻ると、部署の上司から留守番電話に伝言が届いていた。伝言の内容は、彼女の助手が書いた報告書に膨大な数の誤りがあったので、それを指摘して助手に戻し、それを訂正させるために締め切りを延ばしたというものだった。ベバリーは、休暇に入る前に自分でその報告書に目を通して承認していたので驚いたのだが、“I'm sorry”と言った。しかし、上司が「誰も責めてはいないよ」と言ったのには腹が立った。上司がこのようなことを言うということは、彼女を責めているように思えたのである。

注

- ℓ. 4 ◇ frame (～ as …) 「(～を…として) 枠にはめる」
◇ one-down 「相手より1つ下の立場」 ⇔ one-up
- ℓ. 5 ◇ apparent 「一見～のように見える」
◇ in that spirit 「その心の中では」
- ℓ. 6 ◇ have trouble with ～ 「～に手を焼く [てこずる]」
- ℓ. 7 ◇ send ～ to the principal's office 「～を校長室に行かせる」
- ℓ. 8 ◇ be suspended 「停学処分になる」
- ℓ. 9 ◇ reassure ～ 「～を安心させる」 cf. reassurance *n.* (安心 (する [させる]) こと)
◇ It's not your fault. 「あなたの責任ではないよ。」
◇ be taken aback 「呆気にとられる」
- ℓ. 12 ◇ establish a connection to ～ 「～とのつながりを築く」
- ℓ. 13 ◇ imply ～ 「～をほのめかす」
- ℓ. 14 ◇ shared feeling 「共感」
- ℓ. 15 ◇ be at fault 「責任のある」
- ℓ. 16 ◇ guilt 「責任」
- ℓ. 17 ◇ the continuation of ～ 「～の続き」
- ℓ. 18 ◇ gender 「性別；性」
◇ grown daughter 「成長した娘」 小さい子供ではないということ。
◇ incident 「出来事」
- ℓ. 22 ◇ dynamics 「(ある状況での) 力関係」
※社会集団・人間心理などの運動に見られる一般的傾向。
- ℓ. 23 ◇ instinctively 「本能的に；直観的に」
- ℓ. 24 ◇ risk a one-down position 「敢えて自分を1つ下の立場に置く」

- ◇ this is not to say that … 「…ということではない」
- ◇ relish ~ 「~を楽しむ〔好む〕」
- ◇ just that ~ = it is just that ~
- ℓ. 25 ◇ set off automatic alarms 「自然に警戒する」
 - ◇ yet 「しかし；けれども」
 - ◇ be heard as apologizing 「謝っているように聞こえる」
- ℓ. 27 ◇ sympathy 「共感；同情」
- ℓ. 29 ◇ be highlighted 「目立つ」
 - ◇ anecdote 「逸話」
- ℓ. 35 ◇ second nature 「慣れ親しんだ」 (←第2の天性)
- ℓ. 38 ◇ ritual 「慣習上の」
 - ◇ be at play 「作用している」
- ℓ. 40 ◇ answering machine 「留守番電話」
 - ◇ division head 「部門長；課長」
- ℓ. 42 ◇ arrange for A to … 「A が…するように手配する」
- ℓ. 43 ◇ type in the corrections 「正しくタイプし直す」
- ℓ. 44 ◇ approve ~ 「~を承認する」

【3】

解答・解説

(1) I [SV]

「そのクラシック音楽のコンサートは昨日でした。」

yesterday や tomorrow, today などは時を表す副詞であって S, O, C にはならないことに注意。

(2) II [SVC]

「今朝はいつものあなたとは違って見えるね。」

一般に第2文型と呼ばれる SVC は、S = C の関係が成立すると言われるが、本問でも、you = yourself であることに注意。第2文型を取る動詞は、be 動詞を始め、限られていることにも注意。

(3) I [SV]

「君の人柄を信じるよ。」

in you は前置詞句となるため目的語ではないことに注意。SVO となる I believe you. 「君の言うことを信じる」という英文とは異なり、believe in A は、「A の存在を信じる；A を是認する；A の人柄を信頼する」などの意味となる。

(4) II [SVC]

「その実験は成功であるとわかった。」

S = C である。(5) との違いに注意。

(5) III [SVO]

「その実験はその理論を証明した。」

prove は第2文型にも第3文型にも用いられるが、このように複数の文型に用いられる動詞は多く、それぞれの使い方に慣れていく必要がある。

この英文では the experiment ≠ the theory であるから第3文型となる。

(6) III [SVO]

「その本を簡単に見つけた。」

easily は副詞であることに注意。

(7) V [SVOC]

「その本は易しいとわかった。」

第5文型 SVOC は O = C もしくは O is C が成り立つと言われる。この英文で easy は形容詞であり、O is C (= the book is easy) が成り立っている。第5文型には「O を C にする」で有名な“make O C グループ”と「O を C という結果〔状態〕にする」という“paint O C グループ”，さらに「O が C だとわかる」という“find O C グループ”，さらに使役動詞・知覚動詞のグループに分ける考え方もある。

Ex. We *named* her Lily.

We *Painted* the wall green.

We *think* him a good painter. etc.

(8) IV [SVOO]

「両親は私に食料を少し残してくれた。」

第4文型 SVO₁O₂ は一般に「O₁にO₂を…する」と訳し、O₁ ≠ O₂ となると言われる。leave O₁O₂ で「O₁にO₂を残してやる」という意味になる。O₁ ≠ O₂ (me ≠ some food) となっていることにも注意。

(9) I [SV]

「彼女は米文学を学ぶために渡米した。」

for America は前置詞句を作っており目的語ではない。また to study …は to 不定詞の副詞用法（目的）であるためやはり目的語にはならない。

○ leave for A 「A に向けて出発する」

(10) V [OSVC (SVOC)]

「その種のシステムを理想的な手続きだと今私たちは呼んでいる。」

目的語が前置された形式であることに注意。We now call that kind of system an ideal procedure. と直してみるとわかりやすい。O = C つまり “that kind of system = an ideal procedure” となっていることがわかる。

【4】

ポイント

冠詞の位置に気をつけて読まなければならない英文がある。また、'the + 名詞'で抽象名詞のような意味を持つ例外的な場合がある。やや難しいが、ここで演習しておこう。

解答・解説

- (1) 俳優でかつ歌手であるその人物は日本語をとっても流暢にしゃべる。
もし The actor and 'the' singer であれば、「その俳優とその歌手 (の2人)」となる。
- (2) この湖では釣糸のついた竿で魚を釣るためにライセンスは必要ない。
rod and line で1つの名詞を作る。
e.g. the bread and butter (バターを塗ったパン), a cup and saucer (受け皿つきの茶碗)
- (3) 彼女には女らしさがほとんどない。
※限られた名詞だが、'the + 名詞'で抽象名詞の意味を持つものがある。
Ex. We managed to keep *the wolf* from the door.
(私たちはどうにか飢えを凌ぐことができた。)

【5】

解答

- (1) オ (2) カ (3) キ (4) ア (5) ウ

解説

- (1) (a) 「大統領はテロリストにまったく譲歩しないという決意だ。」
○ make a concession to ~ 「~に譲歩する」
○ be determined not to ... 「…しまいと決心する」
< determine A to ... 「Aに…しようと決心させる」
- (b) 「今年の美しい秋は雨の夏を埋め合わせることになる。」
○ make up for ~ 「~の埋め合わせをする」 = compensate for ~
※ will が「推量」を表す場合、「可能性の高い推量」であるので、日本語の「だろう」とは対応しないことが多い。
- (2) (a) 「家全体にペンキを塗り始めたが、前面だけしか終わらなかった。」
○ set out to ... 「…し始める」 cf. set out for ~ (~に出発する)
- (b) 「彼の行動は大変規則正しいので、彼を見て時間を合わせることができよう。」
○ set ~ 「~を定める」
○ by は「判断の基準」を表す。
○ could ... 「…かもしれない」(仮定法過去; 婉曲)
○ 肯定文の場合, may, might, could は「現実の可能性」, can は「理論上の可能性」を表す。ただし、否定文の場合、この区別は当てはまらない。
- (3) (a) 「彼は私をデートに誘い続けているが、私は彼をそれほど魅力的だと思っていない。」
○ take out ~ 「~を連れ出す」 out は副詞。
○ keep ...ing 「…し続ける」 ※動作の反復

- not really (部分否定)
- (b) 「すみません、失礼しました。私が言ったことをすべて取り消します。」
 - take back ~ 「~を取り消す」 back は副詞。
- (4) (a) 「子供たちをどうしましょう。」「公園で遊ばせておきなさい。」
 - do with ~ (疑問詞 what とともに) 「~を処置する」
- (b) 「彼女は幼すぎて分別がない。彼女は彼がどんなことをしても不正にならないと思っ
ているようだ。」
 - do no wrong (通例 can とともに) 「どんなことをしても不正にならない(ほど
権力がある)」
 - know better (than to …) 「(…するほど) 愚かではない; (…しないほど) 分別
がある」
- (5) (a) 「私があるあなたなら、彼女と論争しないだろう。彼女はあなたよりうわ手だ。」
 - have [get] the better of ~ 「~に勝つ」
 - ※この慣用句の中での have, get は両方とも動作を表すので両方とも可。
 - I wouldn't argue with her if I were you. (仮定法過去)
- (b) 「私は彼らは我々の申し出にあまり興味がなかったという印象を持っている。」
 - have an impression that 節 [of] 「…であるという印象を持つ」
 - この have は状態動詞, get は動作動詞なので、内容的にここでは不可。したがっ
て、正解は have。

【6】

解答

- (1) b (2) b (3) d (4) d (5) d (6) d

解説

- (1) a 「早くお会いしたいです。」 [hope to …] ○
 b 「私の代わりに会議に出席していただければと思うのですが。」
 ○ hope A to … ×
 hope for A to … ならば○
 ※ for A は不定詞の意味上の主語。
 ○ in place of one = in one's place 「人の代わりに」
 c 「息子が医者になってくれればと思っている。」 [hope that 節] ○
 d 「明日は雨は降らないと思う。」 [hope (that) 節] ○
- (2) a 「子供は大人よりも感情を表にしやすい。」 [show] ○
 b 「私は犬に新聞を取って来ることを教えようとしたが、失敗した。」
 ○ show A to … ×
 この場合 teach A to …にする。
 ○ fetch ~ 「~を取って来る」
 c 「その小説家はパーティーに姿を見せなかった。」
 ○ show oneself 「現れる」 = appear ○

- d 「トムが明日町を案内してくれる。」
○ show A around ~ 「A に~を案内する」 ○
- (3) a 「あなたの真意はわかります。」
○ mean ~ 「~を意図する」 ○
b 「君は本当に転職するつもりか。」
○ mean to … 「…するつもりである」 = intend to … ○
c 「ボブは君に悪気があってやったのではない。」
○ mean A B 「A に B を与えるつもりである」 ≡ mean B to A
d 「法律をもっと厳しくすれば交通事故は減るだろうと言う人々がいる。」
○ mean that 節 「…のつもりで言う」 (この場合、文脈から say が適切。) ×
- (4) a 「この靴は私には合わない。別のを見せてくれ。」
○ fit ~ 「(衣服などが) ~に (大きさ・形などが) 合う」 ○
○ some others 「別のもの (複数個)」 [another なら 1 個]
b 「鍵が鍵穴に合わなかった。」
c 「あの小さな喫茶店では、自分の気分合う音楽を選ぶことができる。」
○ fit ~ 「~に (目的・用途が) 合う」 ○
d 「申し訳ありませんが、6時では都合が悪いのです。」
「~に都合が良い」の意味では、suit を用いる。×
- (5) a 「ジェーンは顔をそむけて、心の混乱を隠そうとした。」
○ cover ~ 「~を (覆い) 隠す」 ○
b 「ジェット機は長距離を短時間で行くことができる。」
○ cover ~ 「~ (= 距離) を移動する」 ○
c 「ブラウン教授の研究は広い分野にわたっている。」
○ cover ~ 「~ (= 範囲・分野) にわたる」 ○
d 「その DVD レコーダーは3万円する。」
「金額・費用がかかる」という場合は、cover ではなく cost を使う。×
- (6) a 「休暇はどのように過ごしますか。」
b 「私は一生を無駄に過ごしたくない。」
○ spend ~ 「~ (= 時) を過ごす」 ○
○ in vain 「無駄に；むなしく」
c 「ホワイト夫人は贅沢品には金を使わない。」
○ spend A on B 「A (= 金) を B に使う」 ○
d 「ロンドンでは楽しい時を過ごすだろう。」
「楽しい時を過ごす」は have a good time が慣用。×

【7】

A.

解答

- (1) What is this triangle the sign of?
- (2) He may have gone home by another way.
- (3) You should not leave her waiting outside in this cold weather.
- (4) How much do you think it costs to keep up this garden?

解説

- (1) sign を動詞ではなく名詞として使うのがポイント。「～の印」は the [a] sign of ～だから、「この三角形は～の印だ」は This triangle is *the sign of* ～. となる。「～」の部分を探ねる疑問文にすると、What is this triangle *the sign of*? となる。
この文は、抽象的な何かの印（ここでは三角形）について尋ねる文で、「この三角形」を交通標識と考えて「この三角形（の標識）は何の印ですか」と尋ねるには、What does this triangular sign mean? となる。
- (2) 「…したかもしれない」は may have 過去分詞で表すことができる。「違う道を通して」の訳し方がポイントだが、ここを by a different way とすると語数オーバーになる。そこで、「別の道を通して」と考えて、by *another way* という言い方を思い付けてほしい。
- (3) 「彼女を外で待たせておく」は、leave と outside が与えられているので、leave her waiting outside となる。「…してはいけませんよ」は you should not …でよい。「この寒いのに」の訳し方がポイントだが、weather が与えられていることから、「こんな寒い天候の中で」と考えて、in this cold weather とする。
- (4) 「どのくらいだと思いますか」を Do you think how much …? としてはいけない。Yes / No では答えない疑問文の場合、“疑問詞 + do you think …?” という語順になる。
cf. Do you know who that old man is? (あの老人が誰だか知っていますか。)
Who do you think that old man is? (あの老人は誰だと思いますか。)
「この庭園を維持する」は、keep up が与えられているので、keep up this garden となる。したがって、How much do you think it costs to keep up this garden? となる。

B.

解答

What nasty weather we're having! Did you see that flash of lightning?

解説

「何て嫌な天気なんだ。」は What nasty weather we're having!, または、Nasty weather we're having! がよく使われる言い方。
 「(天気が) 嫌な」は他に awful, terrible, wretched などを用いることもできる。
 今現在の天気を言っているのので、we're having と進行形にする点と、weather は形容詞が付いても不可算名詞である点に注意。別の表現として、Who brought [ordered] this weather? (誰がこんな天気を持ってきたんだ → ひどい天気だ。) というものもある。
 「今ピカッと光ったの見たかい?」は、「雷」は thunder だが、「雷を伴う嵐」は

thunderstorm, 「ゴロゴロ雷が鳴ること」は a clap of thunder, 「雷がピカッと光ること」は a flash of lightning のように英語では区別する。ここでは、最後の a flash of lightning を用いて、Did you see that flash of lightning? とするのがよい。
なお, lightning を lightening (軽くすること (< lighten)) と混同しないように注意。

【8】

A.

解答

(1) Practice again and again until you become satisfied with how you perform your presentation.

別解 Practice repeatedly till you think the performance of your presentation is perfect.

(2) I am sure that they will come back safely.

別解 They will certainly return safe and sound.

(3) Stop being so cynical, or you will be misunderstood and that will work against you.

別解 Why don't you stop being so cynical? It is you who will be misunderstood and (it is) you who will suffer.

Don't you think you should give up that cynical attitude? You are the one who will lose out when people get you wrong.

解説

(1) 日本文を「プレゼンテーションの出来に満足がいくまで」と「何度も練習しなさい」に分けて考えてみよう。「何度も練習しなさい」は命令文にすればよい。「…まで」は until や till を使って副詞節で表そう。

「プレゼンテーションの出来」は how you perform [give] your presentation のように表す。名詞表現にするなら the performance of your presentation のように言う。あるいは、意識して your presentation としても可である。

「満足がいく」は文字通り become [get] satisfied with ~ (～に満足する) を使ってもいいし、「完璧だと思う」と考えて、think the performance of your presentation is perfect としてもよい。

「何度も」 again and again ; repeatedly

「(～を) 練習する」 practice (～)

(2) 「きっと」は主語に I を立てて、I am sure (that) …とするか、主語を They にして副詞 certainly を使うとよい。

「無事(に)」 safely ; safe and sound (be, come, arrive, return, bring, see, keep などの後ろにきて副詞的に用いられる。)

「帰って来る」 come back ; return

(3) 「…したらどうだい？」は要するに「…しなさい」ということなので、命令文で表すとすっきりする。ここで前半・後半を合わせて、“命令文, or [otherwise] S will …” (～しなさい。さもないと S は…するだろう) という構文で表せることに気づくと早道だ。

前半は命令文ではなくても、'丁寧な提案・軽い命令'を表す Why don't you ...? を使ってもよいし、日本語通り疑問文にして、Don't you think you should ...? としてもよい。後半の「…するのは自分だよ」は単純に S will ...と未来時制で表してもよいが、it is ~ who ... (…するのは～だ) の強調構文で表してもよい。あるいは、you are the one who will ... (…するのはあなただ) のような文でも日本語のニュアンスを伝えることができる。

「斜に構える」は「皮肉っぽい態度をとる」とか「反抗的な見方をする」と読み換えられる。「そんなふうに」は so や such にして前に付けるとよい。

「斜に構える」は be cynical (皮肉である), take [assume] a challenging attitude (反抗的な態度をとる) の他、「後ろ向きの；否定的な」ととらえれば be negative も使える。

「…するのをやめる」stop ...ing; give up ...ing. that cynical attitude (そんな皮肉っぽい態度) などの名詞句を目的語にして続けてもよい。

「誤解される」be misunderstood。あるいは people を主語にして get you wrong とするのも手だ。

「損をする」lose out (損をする) / suffer (困った目にあう)。他に、S works against ~ (S (=状況) が～に逆らうように作用する) / S gives ~ a hard time (S (=周囲の人間など) が～につらい思いをさせる) といった表現もある。

B.

解答

(1) The simplest way to write good English is to try writing as if you were speaking.

別解 If you want to write English well as easily as you can, just try to imagine you were talking to somebody.

(2) What matters to you is not whether you are good-looking or not, but whether you have a warm heart.

別解 What is important to a person is not whether he is good or bad-looking but whether he is warm or cold-hearted.

(3) No matter how strong your interest in something may be, it will eventually be replaced by another as long as you go on satisfying your intellectual curiosity.

別解 No matter how strong your interest in something may be, so long as you continue to satisfy your intellectual curiosity, that interest will eventually be overtaken by another.

解説

(1) 文の骨格は、「…する一番簡単な方法は [S] 書いてみること [C] である [V]」と SVC の構文にするのが最適。あるいは、日本語を「できるだけ簡単によい英語を書きたいのなら、あたかも話をしているかのように書いてみなさい。」と読み換えて

別解 のように 'if 節 + 命令文' で表してもよい。

ポイントは「あたかも話をしているかのように」の部分。'様態'の副詞節の 'as if S + V' を使うことができる。この表現では動詞部分は仮定法を使うので、as if you

were talking となる点に注意。

「よい英語を書く」 write English well ; write good English

「一番簡単な」は easy の最上級 easiest, simple の最上級 simplest を使えばよいが、

別解のように as ~ as you can (できるだけ~) の形にしてもよい。

「話をする」 talk ; speak

「書いてみる」というのは「書くように努める」という意味にとれば try to write となる。「試しに書いてみる」という意味にとれば try writing の形にしてもよい。

- (2) 「大事なことは A ではなく B である」が構文の骨組み。What is important is not A but B という構文になる。ポイントは not A but B で「A ではなくて B」という相関語句。

「人にとって」の「人」はよく出てくるポイント。本問では総称人称 (= 漠然と人間一般を意味する場合) で you が最も好ましいが、客観的に表現して a person や people としてもよい。

「大事なことは…である」 What matters [What is important] is … ; The important thing is … ; The point is …

「顔がいい」 be good-looking ; have a good [fine ; nice ; attractive ; pleasing] face。または one's features (顔立ち) are good [nice ; attractive ; agreeable] などでも表せる。なお、日本語化している handsome は主に男性に使われる。

「温かな心を持つ」 be warm-hearted [kind-hearted ; kind] ; have a warm [kind ; tender] heart など。heart という語を用いずに、be kind としてもよい。

- (3) 「~がどれほど…であろうとも」は‘譲歩’の意を表す構文 'no matter how [however] 形容詞 ~ is', 「…する限り」は‘様態’の副詞節 'as [so] long as S + V' で表す。以上の2つの副詞節を前後に配して、その間に主節 (= 「結局それは~だろう」) を挟むと安定する。**別解**のように日本文通りの語順で訳出するのも、もちろん可能である。

「~に対する興味」 one's interest in ~

「知的好奇心を満足させる」 satisfy one's intellectual curiosity

「…し続ける」 continue to … […ing] ; go [keep] on …ing

「結局」 eventually ; finally

「別の興味」 another interest だが、interest は既出なので、それを含めて another 1 語で済ませるのがよい。

「A が B にとって代わる」 A replaces B ; A takes the place of B ; B is replaced by A ; B gives way to A。「A が B を追い越す [抜く]」と考えれば A overtakes B [B is overtaken by A] のような表現も使える。

【9】

解答・解説

◆は『解体英熟語 改訂第2版』の参照番号を示す。

- (1) (A) look (B) up ◆ 252

○ look up ~ in … 「~を…で調べる」 up は副詞。

- (2) (A) go (B) on ◆ 253
○ go on ...ing 「…し続ける」 on は副詞。
- (3) (A) brought (B) about ◆ 255
○ bring about ～ 「～を引き起こす」 about は副詞。
- (4) (A) give (B) in ◆ 258
○ give in to ～ 「～に降参する」 in は副詞。
- (5) (A) lay [put] (B) aside ◆ 261
○ lay [put] aside ～ 「～ (=お金など) を取っておく」 aside は副詞。
- (6) (A) took (B) over ◆ 262
○ take over ～ 「～を引き継ぐ」 over は副詞。
- (7) (A) turned (B) down ◆ 265
○ turn down ～ 「～を拒絶する」 down は副詞。
- (8) (A) brought (B) up ◆ 270
○ bring up ～ 「～を育てる」 up は副詞。
- (9) (A) given (B) up ◆ 273
○ be given up for lost 「もう救いがたいものとしてあきらめられる」 up は副詞。
cf. be given up for dead (死んだものとしてあきらめられる)
- (10) (A) made (B) up ◆ 275
○ make up *one's* mind to ... 「…しようと決心する」 up は副詞。
- (11) (A) carry (B) out ◆ 286
○ carry out ～ 「～を実行する」 out は副詞。
- (12) (A) make (B) out ◆ 288
○ make out ～ 「～を (目や耳で) 理解する」 out は副詞。
- (13) (A) laid (B) off ◆ 292
○ lay off ～ 「～を解雇する」 off は副詞。
- (14) (A) worn (B) out ◆ 297
○ wear out ～ 「～を疲れさせる」 out は副詞。
- (15) (A) set (B) out ◆ 300
○ set out 「出発する」 out は副詞。
set は過去形, 過去分詞とも同形。
- (16) (A) called (B) off ◆ 304
○ call off ～ 「～を中止させる」 off は副詞。
- (17) (A) showed (B) off ◆ 305
○ show off ～ 「～を見せびらかす」 off は副詞。
- (18) (A) put (B) off ◆ 308
○ put off ～ 「～を延期する」 off は副詞。
put は過去形, 過去分詞とも同形。
- (19) (A) put (B) on ◆ 317
○ put on airs 「気取る」 on は副詞。

< put on ~ 「～な態度を装う」

(20) (A) getting (B) across ◆ 322

○ get across ~ 「～を人にわからせる」 across は副詞。